

地獄の一季節註解 (十二)

小田良弼

Mais, après une pénétrante caresse, il disait : « Comme ça te paraîtra drôle, quand je n'y serai plus, ce par quoi tu as passé. Quand tu n'auras plus mes bras sous ton cou, ni mon cœur pour t'y reposer, ni cette bouche sur tes yeux. Parce qu'il faudra que je m'en aille, très loin, un jour. Puis il faut que j'en aide d'autres : c'est mon devoir. Quoique ce ne soit guère ragoûtant chère âme » Tout de suite je me pressentais, lui parti, en proie au vertige, précipitée dans l'ombre la plus affreuse : la mort. Je lui faisais promettre qu'il ne me lâcherait pas. Il l'a faite vingt fois, cette promesse d'amant. C'était aussi frivole que moi lui disant : « Je te comprends. »

でも、身に滲みる愛撫の後で、あれはこんな事を言ふのです。『俺がなくなったら、お前がこんな風に暮して来たことが、どんなにお前に滑稽に見えるだらう。お前の頸にはもう俺の手が絡まず、お前の休むのにもう俺の胸がなく、お前の眼の上にもうこの口が接吻しなくなったその時には。何故って、俺はいつかは、遠い処に行っちゃふんだからな。それに他の奴等だって助けてやらなくてはならない、それが俺の義務なんだ。たとひ、あんまりぞっとしない仕事かも知れない

が……解ったな……』忽ち妾は、あれがなくなつて、死といふ一番恐しい影の中に投げ落されて、眼が眩いて苦しんでゐる自分の姿を目に浮べました。妾はあれに妾を捨てないやうにと約束させました。あれはこの恋人の約束を、幾度も幾度も誓つたのです。こんなものは、妾があれに『妾にはあなたが解ります』と言つてゐたのと同様に好い加減なものでした。

かうして一致融和し、感激して相共に過したことも、それが所詮は Vierge folle にとつて un autre monde じゃあつたはずれば、L'Époux infernal がなくなれば、如何にも drôle に見えることであらう。この pénétrante caresse が mes bras が mon cœur が cette bouche が 男女間の愛によるものであるとともに、単なる男女間の愛につきるものではなく、慈悲救済による至上の愛によるものであり、amour divin としての愛に基づくものである。

したがって、かかる愛は Vierge folle に対するものであるとともに、万人に向けられるべきものである。Vierge folle 一人に止めることは許されないわけである。Parce qu'il faudra que je m'en aille, très loin, un jour といふ所以である。Neant を行ずることは愛を行ずることだ

あつた。Puis il faut que j'en aide d'autres と云ふ所以である。ランボオにおける愛と救済については、すでに Mauvais Sang, P. 26 の条において説明した。詳しくは同所を参照されたい。その概略を述べれば、ランボオにおける愛は、いはば菩薩行としての慈悲であり、この Delires, I, P. 48 にも語られてゐるやうに、先度他の愛である。もちろん、それはエロスの愛でもなく、キリスト教的愛でもない。新しい愛であつた (Cf. Vies; A une Raison; Adieu, P. 87.)。

新しい愛といふのは、それがけつして、死の友としての愛ではなく、有化還相行における愛、下界における愛であつたことを意味する (Cf. Mauvais Sang, P. 21; Génie: — charités perdues.)。その愛は、一切の存在の根拠としての、その意味で fatalité と云つた Bonheur、その故にまた誰しもがのれ得ぬ Bonheur の世界へ導き、安住せしめることになり、本来、かかる Bonheur が public なものであつた (Cf. Mauvais Sang, P. 26.) やうに、すべての人に対する愛であり、すべての人が、この下界において、有のままに救はれ得る底の愛であつた (Cf. Génie.)。

しかも、この救済に対しては、祈りを求めず、ただ信仰のみを要するものである (Cf. Nuit de l'Enfer.)、かかる信仰自体が親達 (Parents) によつて絶えず呼びなまされるものである。信仰をうながしてやまないものである。正に親鸞的な意味における至心廻向に該当する愛であつたのである (Cf. Comédie de la Soif; Génie; L'Impossible.)。

即ち、新しい愛として、この下界において有のままに、信ずることにおいて宿命的にすべての人が救はれる、すべての人を救はんとする、し

かも先度他としての愛であつた。先度他であるといふことは、もちろん Mauvais Sang, P. 21 でも語つてゐるやうに abnegation を媒介とするものであり、かへつて愛を行ふことは、Neant を行ふことであつたのである。

しかも、その愛を行ふことは、有化還相行として、この monde の réalité épineuse, rugueuse に足を据ゑることによる苦惱行を伴ふのである (Cf. Nuit de l'Enfer; Bottom; etc., etc.,) 'ce ne soit guère ragoutant と云ふわけである。しかし、それこそ如何に ragoutant ではないかと云ふ、ランボオの神の世界における catechisme の全ちを云ひつゝ (Cf. Nuit de l'Enfer, P. 34, — l'exécution du catechisme.)、c'est mon devoir と云ふ所以である。

Vierge folle と云つた L'Epoux infernal の世界が所詮は un autre monde であり、しかも、ここからいつて来て、彼のぬない日のことを考へれば、行くに行き得ず、退くに退き得ず、絶望の死の淵につき落ちれる想ひをするわけである。如何に捨てない約束をさせ、promesse d'amant をせよと、所詮は絶対の断絶をまぬがねならん以上、Vierge folle の空虚な "Je te comprends" と同じく、それは空虚な言葉にすぎないわけである。

《 Ah ! je n'ai jamais été jalouse de lui. Il ne me quittera pas, je crois. Que devenir ? Il n'a pas une connaissance ; il ne travaillera jamais. Il veut vivre somnambule. Seules, sa bonté et sa charité lui donneraient-elles droit dans le monde

réel ? Par instants, j'oublie la pitié où je suis tombée : lui me rendra forte, nous voyagerons, nous chasserons dans les déserts, nous dormirons sur les payés de villes inconnues, sans soins, sans peines. Ou je me réveillerais, et les lois et les moeurs auront changé, — grâce à son pouvoir magique, — le monde, en restant le même, me laissera à mes désirs, joies, nonchalances. Oh ! la vie d'aventures qui existe dans les livres des enfants, pour me récompenser, j'ai tant souffert, me la donneras-tu ? Il ne peut pas. J'ignore son idéal. Il m'a dit avoir des regrets, des espoirs : cela ne doit pas me regarder. Parle-t-il à Dieu ? Peut-être devrais-je m'adresser à Dieu. Je suis au plus profond de l'abîme, et je ne sais plus prier.

ああ、妾はけっしてあの人を嫉妬した事などありません。あれは妾から離れはしません。妾は信じてゐます。どうなる事でせう。あれには、一人の知人もありません。決して働かうとはしません。夢遊病者のやうに暮して行きたいのです。あれの氣立てのよさと愛情とだけで、現実の世間で道理がとほるといふわけに参るでせうか。時々妾はこの身の陥り込んだ同情をうっかり忘れて了ふのです。あれは妾を強くしてくれるだらう、二人して旅をしよう、無人の境に狩をしよう、見知らぬ街々の鋪石の上に、なげやりに苦もなく寝てしまはう、などと。或はまた、眼が覚めてみると、——あれの魔法の御蔭で、——世の掙も習しも屹度変つてゐるだらう、この世は變つてゐなくても、妾の希ひや、歎びや、暢気さの邪魔するものはあるまい。ああ、子供の

本に書いてあるあのような冒険生活が、こんなに悩んだ御褒美に、妾のものにならないでせうか。あれには出来ない事です。妾にはあれの理想がわからない。あれは数々の悔恨〔未練〕や希望を持つてゐると、妾に申しました。そんなこと、妾の知らう筈はありません。あれは神様に話をしてゐるのでせうか。恐らく妾の方でも、神様にお話しなければなりません。妾は奈落のどん底にゐます、もうお祈りする術も知りません。

前節に「いつかは遠くへ行かねばならぬことをいひ、 promesse d'aimant をくりかへしてみても、それが自分のごとく "Je te comprends" と同様、空虚な言葉に過ぎないことは明らかであり、両者の間の断絶は如何ともし難いものではあるけれども、彼の愛はすべてに及ぶ普遍的な愛であり、le monde のすべてに開放せられた愛である (Cf. Génie : — II nous a connus tous et nous a tous aimés. — 彼は俺達すべてを知つた、俺達すべてを愛した。 — II est l'affection et le présent puisqu'il a fait la maison ouverte à l'hiver écumeux et à la ruineur de l'été. — 泡立つ冬に、夏のざわめきに、家を明け放つたからには、彼は愛情だ、現在だ。.....)。そのことを知つてをり、また、その愛が、すべてのものに対して信仰を呼びさまし、迎へとらざるばやまの Parents の愛びちんちん (Cf. Comédie de la Soif, I; L'Impossible; Génie.) ならには II ne me quittera pas とも信ずるわけであり、けつして嫉妬することもなかつたわけである。

しかし、その L'Epoux infernal の世界は、結局絶対個別の世界で

あり、そのかぎりにおいて、どこに救ひの手も、友の手も求め様のない
atrocé solitude の世界である。(Cf. *Adieu; Les Soeurs de Charité;*
etc.) le monde, の一切の否定を媒介とするところに現成する世界であ
 り、したがって、そこには *le monde* の知性やかはらひは否定しつくさ
 れ、そのかぎりにおいて *le monde* に対処するすべをもたない行雲流水
 の *vie* があるわけである。

Cf. *Délires*, II, P. 60.

*l'action n'est pas la vie, mais une façon de gâcher quelque
 force, un énévement. La morale est la faiblesse de la cervelle.*
 行動「生活のたつき」は生活ではなくて、或種の力、或る神経の苛
 立しさを廉売する方法なのだ。「或る種の力の浪費だ。消耗だ。」道徳
 とは脳髓の弱さだ。

Cf. *Mauvais Sang*, P. 28.

*Quant au bonheur établi, domestique ou non non, je ne
 peux pas. Je suis trop dissipé, trop faible. La vie fleurit par
 le travail, veille vérité: moi, ma vie n'est pas assez pesante,
 elle s'envole et flotte loin au-dessus de l'action, ce cher point
 du monde.*

家庭のものであるにしろ、ないにしろ、既に設定された幸福は……
 真平だ、とてもいけない。俺はあんまり気が散り過ぎる、弱すぎる。
 労働によって生活が花咲くとは、今も羨らぬ真実だ。「古めかしい真
 理だ。」 処が俺の生活は十分目方が掛からない。世界の重点、行動と
 いふものの「この世の大切な点である、たつきといふものの」遙か上

層に飛び去り、漾つてゐるのだ。

Cf. *Mauvais Sang*, P. 14.

J'ai horreur de tous les métiers.

ありとあらゆる職業がやり切れなう。……

*Il n'a pas une connaissance d'un vaqued'ami, il ne travaillera
 jamais d'un vaqued'ami. 本質的には le monde の女としての Vierge
 folle が、かかる世界のただ中に引き入れられて Que devenir? d'un
 想ひをするのも当然のことである。*

絶対の真理を行なへ、即ち Néant を行なへばならぬ *vie* の
 一歩一歩の一事一事を、真理をせめて生きよとの *Nature* と *l'homme*
vie の *Saisons*, の *Châteaux* の語る *vie* が、また *L'Eternité* の語
 る *vie* の *vie* の *vie*、悪にゐるなら、具体的な、抽象
 的観念的ならぬ此岸における神の世界があり、安住の世界があるわけだ
 が、かかる今、*saïson* の一事、*châteaux* に絶対真理を行なへ、即ち
Néant を行なへ *Braises de satin* と *l'homme* の *vie* が、*le monde* の *l'homme*
 場から見れば *parasse grossière* に見えぬわけである。

Cf. *L'Impossible*, P. 69.

*J'envoyais au diable les palmes des martyrs, les rayons de
 l'art, l'orgueil des inventeurs, l'ardeur des pillards; je retournais
 à l'Orient et à la sagesse première et éternelle, — Il paraît
 que c'est un rêve de parasse grossière!*

俺は殉教者の栄光を、芸術の光輝を、発明家の驕慢を、掠奪者の情
 熱を、かなぐり捨てた。俺は再び東洋に帰った。永遠の、当初の叡智

に帰した。——なんの事はなら、図々しい怠け者の夢か。〔図々しい怠け者の夢のやうにも見える。〕

Cf. Vies, I.

Ma sagesse est aussi dédaignée que le chaos. Qu'est mon néant, auprès de la stupeur qui vous attend ?

混沌をちげすむやうに、俺の叡智をちげすむのだ。君達を待つ昏睡に比べては、俺の虚無〔無〕とはさあそも何か。

かかる la sagesse première et éternelle の le monde の立場からは軽蔑をまぬがれず、Néant を行かぬことと、stupeur と見ぢがくられぬこと。Vierge folle な Il veut vivre somnambule とさうわけがある。

ランボオの世界、したがって L'Époux infernal の世界は le monde の否定を媒介とする無化往相即有化還相行である。無即有、有即無なる否定的轉換が Néant による、Néant を行かぬことは愛を行かぬこととあった。一歩一歩の一事一事に Néant を行かぬことと Nature の世界が現成するのだった。そしてそのすべての richesses flamboyant, aquarium ardent とははれる生々潑潑たる vie が展開せられるのだった。かかる Nature とこの vie とは、善であり、美であったのである。

Cf. Mauvais Sang, P. 24.

Connais-je encore la nature ? me connais-je ? — Plus de mots. J'ensevelis les morts dans mon ventre. Cris, tambour, danse, danse, danse danse ! Je ne vois même pas l'heure où,

地獄の一季節註解

les blancs débarquant, je tomberai au néant.

Faim, soif, cris, danse, danse, danse, danse !

俺はまだ自然といふものを知つてゐるだらうか。自分を俺は知つてゐるか。——最早言葉は無用だ。俺は死んだものを腹の中に葬る。叫び、太鼓、ダンス、ダンス、ダンス、ダンス。白人共が上陸して俺は虚無〔無〕のまま唯中に墜ちて行くだらうが、何時の事か、俺には一向解らない。

飢ゑ、渇き、叫び、ダンス、ダンス、ダンス、ダンス。

Cf. Mauvais Sang, P. 26.

Vite ! est-il d'autres vies ? — Le sommeil dans la richesse est impossible. La richesse a toujours été bien public. L'amour divin seul octroie les clefs de la science. Je vois que la nature n'est qu'un spectacle de bonté. Adieu chimères, idéals, erreurs !

急がう。他に生活があるともいふのか。——豊かち〔富〕の中で居眠つてゐるのは不可能だ。豊かち〔富〕とは常に公衆の利益〔公衆のもの〕だったのだ。神の愛だけが知識の鍵を与てくれる。自然は善心に溢れた見世物に過ぎない。〔自然は慈愛の展覧に外ならぬ。〕と俺には見えるのだ。妄想よ、理想よ、〔觀念よ〕過失よ、おちらばた。

Cf. Matinée d'Ivresse.

O mon Bien ! O mon Beau ! Fanfare atroce où je ne trébuche point ! Chevalier féerique ! Hourra pour l'oeuvre inouïe et pour

le corps merveilleux, pour la première fois ! Ce poison va rester dans toutes nos veines même quand, la fanfare tournant, nous serons rendus à l'ancienne inharmonie. O maintenant nous si digne de ces tortures ! Nous avons foi au poison. Nous savons donner notre vie tout entière tous les jours.

Voici le temps des Assassins.

ああ、俺の『善』、俺の『美』。兇暴な軍楽の裡に、俺は断じてよめきはしない。幻の画架。前代未聞の作品と素晴らしい肉体とを、さあ歓呼して初めて迎へよう。……軍楽が旋回して、俺達が昔の不調和に再び送還されるであらう時にさくも、この毒は、俺達の血管の隅々にまで残るだらう。ああ、今こそ、かういふ苛責が如何にもふさはしい俺達は、……俺達は毒薬を信じてゐる。いつの日にもこの命を洗ひぬがひ投げ出す事を知つてゐる。

今こそ、『刺客達』の時である。

かく「死を埋葬」し、「poisonを信ずる」“Assassins”の時代なる有化還相行が Nature の世界であり、かかる Nature とつこの vie が Bien である。Beau である un spectacle de bonté に外ならなかつたのである。

かく L'Epoux infernal の bonté と charité と、le monde の否定を媒介とする Néant, Nature を行ぢるものに出つてゐる。かくれば、功利的実利的な le monde に対処する手段として、そのまゝに通ずるはぢはならぬ。le monde に通用するものとして、l'arbre du bien et du mal (Matinée d'Ivresse) に属するものとして、bonté である。

男女間の amour 乃至はキリスト教的 amour であり、それらは、さうしても、埋葬せられるべきものであり、否定せられるべきものである。そのうしては、属するものとして、Néant を行ぢる Nature の世界におけるものとして、bonté である。charité である。たのびである。かかるものが、そのまゝに le monde に通ずるわけはならぬ。Seules, sa bonté et sa charité lui donneraient-elles droit dans le monde réel ? とうなす所以である。

かく、その bonté と charité と、そのまゝに le monde に通用しないものがあり、Néant は stupeur とも見えず、その sagesse première et éternelle に基づく世界もただ paresse grossière とも見えるものではあるけれども、なほうことならぬ、それらが le monde に通用するものであつたらう。L'Epoux infernal に対して同情を感じざるわけである。

もし、かかる bonté と charité が通用するやうならば、そこに展開せられる世界は、絶対真理としての Néant を行ぢる Nature の世界であり、無畏にして安住の世界である。絶対強者の世界である。lui me rendra forte とうなむわけである。

Cf. Mauvais Sang, P. 20.

La vie dure, l'abrutissement simple, — soulever, le poing desséché, Je couvercle du cercueil, s'asseoir, s'étouffer. Ainsi point de vieillesse, ni de danger : la terre n'est pas française. 辛い命、単純な愚鈍、——萎びた拳で、棺桶の蓋を揚げ、腰を下して、息が絶えるのだ。かうすれば老衰もなく、危険もない。恐怖はつ

ランス趣味ではなう。

Cf. Mauvais Sang, P. 19.

Je reviendrais, avec des membres de fer, la peau sombre, l'oeil furieux : sur mon masque, on me jugera d'une race forte. J'aurai de l'or : je serai oisif et brutal.

俺は、鋼鉄の四肢と、浅黒い肌と、兇暴な眼とをもらって、還つて来るだらう。人々は俺の面貌マツメを眺めて強烈な人種の生れと考へるだらう。黄金を俺は貯めよう、「黄金を俺は得るであらう。」何も為なら、しかも獣物のやうな男にならう。「生れたままのうぶな男であるであらう。」

Cf. Mauvais Sang, P. 22.

《Faiblesse ou force : te voilà, c'est la force. Tu ne sais ni où tu vas, ni pourquoi tu vas, entre partout, réponds à tout.

On ne te tuera pas plus que si tu étais cadavre.》

「弱気にしろ、強気にしろだ、「弱くても、強くても、」貴様がちやうしてゐる、それが貴様の力ぢやないか。貴様は何処に行くのか知りはない、何故行くのかも知りはない、何処へでも到る処に入つて行け、何にでも返答をしろ。貴様が仮りに屍体であつたとしたら、それ以上に殺さうとする奴もあるまう。」

Cf. Mauvais Sang, P. 26.

La raison m'est née. Le monde est bon. Je bénirai la vie. J'aimerai mes frères. Ce ne sont plus des promesses d'enfance. Ni l'espoir d'échapper à la vieillesse et à la mort. Dieu fait ma

force et je loue Dieu.

理性は俺に誕生した。世の中はなかなか佳い。俺は生活を祝福しよう。同胞を愛さう。これは、もはや少年時代の約束事〔のぞみ〕ではない。老衰と死とを遁れようとする希ひでもない。神が俺の力を作る。俺は神を崇める。

また、その世界は一所に滞ることのない、生々潑潑たる流転の世界である。はからひもなく、苦悩もない、innocenceの行雲流水の世界である。

Cf. Génie.

Son pas ! les migrations plus énormes que les anciennes invasions.

彼の歩み。古代人の侵寇よりも巨大な移住。

Cf. Comédie de la Soif, 5.

Mais fondre où fond ce nuage sans guide,

—— Oh ! favorisé de ce qui est frais !

Expirer en ces violettes humides

Dont les aurores chargent ces forêts ?

よし、当所ない浮雲の、とろける処でとろけよう。

—— ああ、爽やかな、爽やかなものの手よ。

露しいた藁のなかでこと切れよう。

明け方が、藁の色に野も山も、染めてくれぬと限るまう。

Cf. Bannières de Mai.

Qu'on patiente et qu'on s'ennuie

C'est trop simple. Fi des mes peines.

Je veux que l'été dramatique

Me lie à son char de fortune.

Que par toi beaucoup, ô Nature,

— Ah moins seul et moins nul ! — je meure.

Au lieu que les Bergers, c'est drôle,

Meurent à peu près par le monde.

やれ忍耐だの退屈だのと、

昔もない話じゃないか！……チェツ、苦勞とよ。

〔チェツ、……俺の苦しみもばかばかしい。〕

ドラマチックな夏こそは〔夏が〕

『運』の車にこの俺を、縛ってくれるでござよろし、〔縛ってくれる

やうに。〕

自然よ、お前の手にかかり、

——ちつとはまじに賑やかに、死にたいものだ！

とくろで羊飼ちんが、大方は

浮世の苦勞で死ぬるとは、可笑しなこった。

Cf. L'Eternité.

Des humains sufrages,

Des communs élans

Là tu te dégages

Et voles selon.

人間共の配慮から、

世間共通の逆上から、

おれはわがちの手を切つて

飛んでゆく……

nous voyagerons, nous chasserons dans les déserts, nous

dormirons sur les pavés des villes inconnues, sans soins, sans

peines とうとう言葉が世の所に行き渡る。うじや dans les déserts とう

む sur les pavés des villes inconnues とうとうのは、うじやうじやう

とうとうなく、流れ行く雲のまま、水のままに、の意がこめられてくるこ

とは言をせむもなごうじやあふ。

Cf. Mauvais Sang, P. 22.

Tu ne sais ni où tu vas, ni pourquoi tu vas, entre partout,

réponds à tout.

貴様は何処に行くのか知りはない、何故行くのかも知りはない

い、何処へでも到る所に入って行け、何にでも返答をしろ。

Cf. Mauvais Sang, P. 20.

La dernière innocence et la dernière timidité. C'est dit. Ne

pas porter au monde mes dégoûts et mes trahisons.

きりぎりの清浄無垢と窮極の臆病。その通り。数々の俺の嫌厭と叛

逆とせいの世に齎さうしても始まる。

それと同時じや dans les déserts にせ、その無化往相の面が、sur les

pavés des villes inconnues にせその有化還相の面が現はられてくる。

とうとうとうとう。

Cf. Mauvais Sang, P. 20.

Allons ! La marche, le fardeau, le désert, l'ennui et la colère.
ちあゝ 前進、荷物、沙漠、倦怠、憤怒。

Cf. Mauvais Sang, P. 24.

Le plus malin est de quitter ce continent, où la folie rôde
pour pourvoir d'otages ces misérables.

最も精巧な「よくなら」やり方は、これらの惨めな人々を人質に取
らうとすべし、狂気がうろこき廻つてゐるこの大陸を、離れることだ。

Cf. Adieu, P. 87.

Recevons tous les influx de vigueur et de tendresse réelle.
Et à l'aurore, armés d'une ardente patience, nous entrerons
aux splendides villes.

生氣と現実の温情との流れ入るすべてを受けよう。暁が来たら俺達
は、燃え上る忍耐の鎧を着て、光り輝やく街々に這入らう。

かくつこさ、何のおそれも、苦悩もない、軽やかな日々が過ぎ行くの
じゃあ。

Cf. Mauvais Sang, P. 25.

Je n'ai point fait le mal. Les jours vont m'être légers, le
repentir me sera épargné. Je n'aurai pas eu les tourments de
l'âme presque morte au bien, où remonte la lumière sévère
comme les cierges funéraires.

俺は悪を少しも冒してゐなかつた。その日その日は爽やかに過ぎて
行き、先き先き後悔する事もなからう。善において殆ど死んだやうに
なつてゐる俺の魂、葬ひの蠟燭のやうに厳しい光が浮き上る俺の魂
に、悩みはなかつたのであう。

あゝひはまた、眼がぢめぢめれば、彼の pouvoir magique のを蔭で
(magique という形容詞は、すでに前にも説明したやうに、ヨーロッパ
的では、キリスト教的でもないランボオの世界に対する形容詞として
merveilleux などという連の語をなすものじゃあ。）世の中の旋も、習は
しもすこかり変つてしまつてゐるであらうと思ふ、とうふことは、前
も II a peut-être des secrets pour changer la vie? (P. 45.) とす
む、その他でも L'amour est à réinventer (P. 43.) とか、nouvelle
harmonie, nouvel amour (A une Raison) とか、あゝひはまた、
un inventeur bien autrement méritant que tous ceux qui m'ont
précédé; un musicien même, qui ai trouvé quelque chose comme
la clef de l'amour (Vies, II.) とか、つてゐるやうに、あゝひはま
た、Mauvais Sang, P. 15~P. 17 で、フランスの歴史のどこをさがし
ても、自己の世界を見出すことができなうと言つてゐるやうに、ランボ
オの世界がヨーロッパ的でも、フランス的でもなく、キリスト教的でも
ない絶対安住の世界、神の世界であつたことに基づく表現であり、あた
かも Antique, Barbare と、あゝひは Gaule の世界に、その具現をみ
てゐたやうな世界が具体化せられるであらうことを思ふわけである。そ
の世界に随順し、そのただ中に入つて行かうとすれば、かくもやと思ふ
わけじゃあ。

Cf. Mauvais Sang, P. 23.

«Prêtres, professeurs, maîtres, vous vous trompez en me
livrant à la justice. Je n'ai jamais été de ce peuple-ci; je n'ai
jamais été chrétien; je suis de la race qui chantait dans le

supplice; je ne comprends pas les lois; je n'ai pas le sens moral, je suis une brute : vous vous trompez.....»

「司祭や教授や先生方、俺を裁判所の手に渡したといふのが君達の誤りだ。俺はもともと、ここに居るこの民族に属してゐたことがない。基督教徒だった事は一度もない。刑罰を受けながら歌を歌つてゐた人種だ。法律など解りはしない。道徳的意識も持つてゐない。俺は一個の禽獣なのだ。「俺は生れたままの人間なのだ。」君達は思違ひを つてゐるのだ……」

Cf. Délirés, II, P. 52.

Je rêvais croisades, voyages de découvertes dont on n'a pas de relations, républiques sans histoires, guerres de religion étouffées, révolutions de mœurs, déplacements de races et de continents : je croyais à tous les enchantemens.

俺は夢みてゐた、十字軍、何の記録もない探検旅行、歴史を持たぬ共和国、抑圧された宗教戦争、風俗の革命、種族と大陸との移動。俺はあらゆる妖術〔歡喜〕を信じてゐた。

けだし、それが Abnégation を媒介とする、Neant を行はずの Nature の世界、絶対愛の世界であり、無畏無求の、一歩一歩に真理をせめる innocence、流転の世界であつてみれば、Lois も mœurs もおそろくは 変ることであらうからである。

また、le monde はそのまぢでも「た」としても、その世界は le monde にゐてゐるなら、いはば莫作の世界（前述参照、Cf. Bannières de Mai.）であり、le monde の相対を媒介として Neant を行はずの世界であれば、

mes desirs, joies, nonchalance を妨げるものもなく、le monde の réalité は、その réalité が、réalité épineuse である、réalité rugueuse でありながら、そこに抽象的観念的ではない具体的な神の世界、安住の世界が現成するわけであり、そこにこそ le chant clair des malheurs nouveaux —— 新しく不幸の清澄の歌声—— もあげられるわけである。また、

Le monde est bon. Je bénirai la vie. J'aimerai mes frères.

Ce ne sont plus des promesses d'enfance. Ni l'espoir d'échapper à la vieillesse et à la mort. Dieu fait ma force et je loue Dieu. (Cf. Mauvais Sang, P. 26.)

世の中はなかなか佳い。俺は生活を祝福しよう。同胞を愛しよう。これは、もはや少年時代の約束事〔のぞみ〕ではない。老衰と死とを遁れようとする希ひでもない。神が俺の力を作る。俺は神を崇める。ともいひ得るわけである。

O saisons, ô châteaux,
Quelle âme est sans défauts ?

季節が流れる、城塞が見える、
「おお、季節よ、おお、城よ」
無疵な魂なぞ何処にあらうか、

といふやうに、相対的なこの時、この所にて、それがそのまま、絶対的な神の世界であり、Bonheur である世界が展開されるのである。かく相対的な世界がいつも媒介となる具体性をもつかぎり、Veillées, I でもいふやうに、それは正に「別事なき」世界でもあるわけだ。

Cf. Veillées, I.

C'est le repos éclairé, ni fièvre ni langueur, sur le lit ou sur le pré.

C'est l'ami ni ardent ni faible. L'ami.

C'est l'aimée ni tourmentante ni tourmentée. L'aimée.

L'air et le monde point cherchés. La vie.

— *Etait-ce donc ceci ?*

— *Et le rêve fraîchit.*

明るい休息だ、熱もなく、けだるさもなく、寝台の上に、草原の上に。

友は、烈しくもなく、弱くもない男。友よ。

愛人は苦しみもせず、苦しめられもせぬ女。愛人よ。

求められたのではない空気とこの世と。生活。

——では、やっぱりこれだったのか。

——かといって夢は風が吹きつゝの。

le monde の vie それが相対的であり、汚濁の世界でありながら、その中で絶対であり、清浄なる神の世界であるわけである。けつしてそれが求められたのではないなら (point cherchés) 今、ここに居ける L'air et le monde が repos éclairé の世界であることは、mes desirs, joies, nonchalances を妨ぐるものがあることは、無碍の世界である。Ou je me réveillerai, et les lois et les moeurs auront changé, —— grâce à son pouvoir magique, —— le monde, en restant le même, me laissera à mes desirs, joies, nonchalances.

と云ふ所以である。

nonchalances とは、*ノンチカリス* 的世界、即ち *L'Époux infernal* の世界 *luxes oisifs* (*Jeunesse*, IV, etc.)、無求 (Cf. *Le loup criait sous les feuilles; Fêtes de la Faim*)、なにかのなき無義の世界 (Cf. *Honte*) と *オシフ* の *oisifs*。無求の、いはば無作の作が、それな *luxes oisifs* と *oisifs* の nonchalances とは、たの *oisifs*。

しかつ *pitie* や *amour*、またかかる夢も描けたのであるが、本質的に le monde の女として *Vierge folle* は、かかる *pitie* も時折は忘れ去つてしまふ。また止むを得ぬことである。そこには、ときのやうな願ひとなつて出づくるわけである。

La vie d'aventures は、直接には上に述べている *nous voyagerons, nous chasserons dans les déserts, nous dormirons sur les pavés des villes inconnues, sans soins, sans peines* の *un* *vie* を *オシフ* の *oisifs*。しかつ、やはりまた、une *Guerre, de droit ou de force, de logique bien imprévue* (Cf. *Guerre*) —— 権利の、或は力の、全く思ひもよらぬ理論の『戦』—— *oisifs* の *oisifs*、恐ろしい研究の夜な夜なをける (*terribles soirs détude*)、大洪水の光をもち、休息と眩暈 (*Repos et vertige / A la lumière diluvienne*) と *oisifs* た。la *vie d'aventures* と *oisifs* 所 *oisifs*。

livres des enfants とは、特別に意味はなぐ、ただ子供の本に用いられる *la vie d'aventures*、その *desirs, joies, nonchalance* の *vie* を意味する *oisifs*、*オシフ* 的な *Délires* II, P. 51

J'aimais les peintures idiotes, dessus de portes, décors, toiles de salimbanques, enseignes, enluminures populaires; la littérature démodée, latin déglisse, livres érotiques sans orthographe, romans de nos aïeules, contes de fées, petits livres de l'enfance, opéra vieux, refrains niais, rythmes naïfs.

俺は白痴のやうな絵を愛してゐた、欄門の飾、舞台の背景、辻芸人の辻びら、看板、絵草紙を。又、時代遅れの文学を俺は愛した。教会のラテン語を、誤字だらけの好色本を、俺達祖先の物語を、妖精の作斬を、少年時代の豆本を、古めかしいオペラを、愚にもつかない韻句を、他愛ないリズムを愛した。

とらつてゐるところと連関をもつてゐる言葉のやうに思はれる。これら peintures idiotes, dessus de porte などと livres des enfants などかつて実際に見受け、夢みた世界でもあつたらうと考へられるのである。richesses inouïes (Vies, I.) の vie, vie d'aventures などたのびあふふと思はれる。

Par instants, j'oublie la pitié où je suis tombée などとておやぐらひ、L'Epoux infernal に対する pitié を忘れ去つた時にあらうとせむさひと、やむな vie d'aventures への結末などへの mes desirs, joies, nonchalances を妨げるものもなき無碍の世界が、彼によつて与へられようと思はれぬわけである。—— II ne peut pas. —— L'Epoux infernal に惹かれ、彼に同情の念のある時ほど、lui me rendra forte, ……と思ひましたのであるが。

おだ、P. 44 など、j'étais sûre de ne jamais entrer dans son monde

と言つてゐるやうに、本質的に le monde の女としての Vierge folle と L'Epoux infernal の理想な女のわかれはちもなつたわけである。—— J'ignore son idéal. ——

L'Epoux infernal にも、さうさうな regrets や espoirs もあつたわけである。もちろんで、それらはつづいても、窮極的な世界との連関において考へられるべき regrets や espoirs であつて、le monde における regrets や espoirs ではないわけである。したがつて Mauvais Sang, P. 27 など

Je ne regrette pas le siècle des coeurs sensibles.

多感な人々の過した「三字略」世紀を俺は惜まなう。

とらつてゐるやうに、かかる coeurs sensibles に対する regrets は、当然否定して去られてゐるわけであるわけであらう。Adieu, P. 86 など

Car je puis dire que la victoire m'est acquise : les grimacements de dents, les sifflements de feu, les soupirs empestés se modèrent. Tous les souvenirs immondes s'effacent. Mes derniers regrets détalent, —— des jalousies pour les mendians, les brigands, les amis de la mort, les arrières de toutes sortes. —— Damnés, si je me vengeais !

俺も今は勝利はわがものと言ひ切れる。歯軋りも、火のやうな息切れの音も、汚臭を放つ溜息も鎮まる。あらゆる不潔な追憶は消える。俺の最後の未練も逃亡する。—— 乞食、盗賊、死の友、全ての種類の落伍者に対する羨望だ。—— 地獄に墮ちた亡者共、若し俺が復讐するつとしたら。

とらいつてゐるやうに、かかる les mendiants, les brigands, les amis de la mort, les arriérés de toutes sortes に對する regrets は最後まじまつたわけである。けだし、これらは「死の友」として、ランボオ的世界の否定的契機をなすものじまり、Les Soeurs de Charité じ、

O Mort mystérieuse, ô soeur de charité

神秘なる死神、おお、これぞまことの看護修道尼！

とらいつてゐるやうに、そこに己が soeurs de charité を求めた一時期もあつたからである。

espoirs とらいつて、同様 Une Saisons en Enfer, P. 8 じ

Je parvins à faire sévanouir dans mon esprit toute l'espérance humaine. Sur toute joie pour l'étrangler j'ai fait le bond sourd de la bête féroce.

俺はあらゆる人間的な希望を、俺の精神の裡に、つひに悶絶をやつした。あらゆる喜びを絞殺する為に、その上に猛獣のやうに聲帯を忍ばせて躍りあがつたのだ。

とらいつてゐるやうに、かかる l'espérance humaine じ、もちろん、否定し去られてゐるわけだが、innocence に到達するまでの段階として、Mauvais Sang, P. 18 じ、

J'attends Dieu avec gourmandise.

俺は貧欲にがつがつと神を待っている。

とらいつてゐるやうに、様々な espoirs もあつたわけであり、あるひはまた、その有化還相行としての愛、救済については、もちろん様々の espoirs もあるわけである。が、もちろん、それらは、L'Epoux infernal

の神の世界に關するかぎりのおのじまり、le monde の女としての Vierge folle に關する regrets や espoirs じ、おのじまり。—— II m'a dit avoir des regrets, des espoirs : cela ne doit pas me regarder. ——

ランボオ的世界、即ち L'Epoux infernal の世界が、聖なる神の世界であつたことは、もはや疑ふべくもない。否定を媒介とする有即無、無即有としての Néant、それがまた真であり、善であり、美であつたのだが、同時にそれが聖なる世界じまりのじまり (sacré, —— Cf. Délires, II. P. 55.)、神の世界じまりのじまり。

Cf. Mauvais Sang, P. 18.

J'attends Dieu avec gourmandise.

Cf. L'Impossible, P. 70~P. 71.

S'il était bien éveillé toujours à partir de ce moment, nous serions bientôt à la vérité, qui peut-être nous entoure avec ses anges pleurant ! S'il avait toujours été bien éveillé, je voguerais en pleine sagesse !

O pureté ! pureté !

C'est cette minute d'éveil qui m'a donné la vision de la pureté ! Par l'esprit on va à Dieu !

俺の精神が、この瞬間から絶えずはっきりと目覚めてゐてくれるとしたら、俺達はやがて真理に行き着くかも知れぬ。真理は恐らく泣いてゐる天使達をつれて俺達を取巻くであらう……絶えずはっきりと目覚めてくれたとしたら、俺は叡智の真只中を漕ぎ渡つてゐるに相

違なからう……

ああ、純潔よ、純潔よ。

俺に純潔の幻想を与へたものはこの目覚めの瞬間だ。——精神を通して、人は神に至る。

その他 Génie の全篇参照。この Génie はランボオの神である。その他ほとんど全作品に、多くの場所に神の世界、神の世界に連関することが語られてゐる。したがつてまた、amour divin, salut について語られるわけである(Cf. Mauvais Sang, PP. 26, 27; Délires, I; Nuit de l'Enfer; etc., etc.,)。しかもその神の世界は、キリスト教的神の世界ではなかつた (anti-christianisme の条参照)。非キリスト教的であつて、且つ神の世界であつた。ひつこく hostile à la religion ではなかつたのである。この問題については詳しくは別に論及せねばならないが、今は別稿にゆづらねばならない。

かくランボオの世界即ち L'Epoux infernal の世界は、聖なる神の世界であつたのだが、それを理解するべくもなからず Vierge folle にも、なほそのことがおぼろげにも感ぜられるのである。Parle-t-il à Dieu ? といふ所以である。尤もこの Parle-t-il à Dieu ? といふ言ひ方は Vierge folle が、自己の神に対する関係を L'Epoux infernal に擬していふ言ひ方である。何故なら、ランボオにおける Dieu は、一切の存在の根拠としての神であり、常に自己の身心を、有を媒介として現成する神であり、したがつて、汚濁即清浄、清浄即汚濁として、有即無、無即有としての神であるが故に、自己対神の如何なる対立相対をもゆるさないものであつた(Cf. Vies, III, — Il ne faut même plus songer à cela. Je

suis réellement d'outre-tombe, et pas de commissions. ——これについては、夢みる事〔想像すること〕すら許されぬ。本当に墓場の向うから来たこの俺だ、何の用事があるものか。——)。したがつて、Parle-t-il à Dieu ? といふ関係は成立せず、むしろ Mauvais Sang, P. 17 の C'est certain, c'est oracle, ce que je dis. 俺の言葉は神託だ、それは極めて確実だ。といつてゐるやうに、自己の言葉が同時に神の言葉であつたのである。それを今は、Vierge folle の立場をもつて Parle-t-il à Dieu ? といつてゐるのである。

かくて L'Epoux infernal の理想も理解し得ず、その regrets も espoirs も所詮は Vierge folle といつては無縁のものであつてみれば、かつ、時には彼に対する pitié も忘れて、le monde の女としての本心に立ち返ってみれば、自己の今おかれてゐる境遇は、どうするすべもない苦しみの深淵にあるわけである。神に救ひを求め、祈るより外にすべもない。が、その苦しみのあまり、今は祈るすべを知らないわけである。—— Peut-être devrais-je m'adresser à Dieu. Je suis au plus profond de l'abîme, et je ne sais plus prier. ——

《Si l'expliquait ses tristesses, les comprendrais-je plus que ses railleries ? Il m'attaque, il passe des heures à me faire honte de tout ce qui m'a pu toucher au monde et s'indigne si je pleure.

若しあれが自分の悲しみを妾に説明してくれても、妾にはあれの嘲

弄以上にそれを了解出来るでせうか。あれは妾を責めます、凡そこの世で妾の心を動かし得たもの全てについて、幾時間も幾時間も妾を責め苛むのです、そして妾が泣けば腹を立てるのです。

L'Epoux infernal の tristesses と railleries もまたその独自の世界に基つて tristesses と railleries とあるわけだから、le monde の女として Vierge folle には、その意味を理解するよりは、あんなわけである。彼の説明の tristesses 也 P. 46 と Paradis de tristesse ともする。この tristesse とあるわけだ。また L'Impossible, P. 70 と la vérité, qui nous entoure avec ses anges pleurant ——真理は恐らく泣いてゐる天使達をくわいて俺達を取巻くであらう。——といつてゐる。この ses anges の tristesses であるわけだ。いづれも有耶無、無耶有たる Néant を行つてゐるうちに由来する tristesses である。le monde における tristesses には、その位置が転倒してゐるわけだ。le monde における bonheur établi (Mauvais Sang, P. 28) である fin aisée である un jour de succès (Angoisse) を目標とするうちに由来する tristesses とあるわけだが、L'Epoux infernal における、これらは先ず否定せられるべきものであつたのである。かかる tristesses はなかつたのである。かく、それはその住んでゐる世界を異にして、その次元を異にしてゐる以上、それが理解されなければならぬ。Mauvais Sang, P. 23 也

Je me voyais devant une foule exaspérée, en face du peloton d'exécution, pleurant du malheur qu'ils n'aient pu comprendre,

et pardonnant ! —— Comme Jeanne d'Arc !

俺は銃殺執行班に面と向つて、激怒した群衆の前に立つてゐたのだ、彼等には了解し得ない不幸に歎きながら、そして彼等を宥しなから。——まるでジャンヌ・ダルクだ。

また、このすぐ後のところでも (P. 48.)

Hélas ! il avait des jours où tous les hommes agissant lui paraissaient les jouets de délires grotesques : il riait affreusement, longtemps. —— Puis, il reprenait ses manières de jeune mère, de soeur aimée.

ああ、蠢いてゐるすべての人間共が、あれには変擬な錯乱の玩具に見えたひと頃もあつたのです。あれは長い事、恐しいくらい笑つて居りました。——それから、再び若い母親のやうな、可愛がられた姉のやうないつもの物ごしに返るのでした。

と述べてゐる。かういふところから出る railleries であり、また tristesses であり、たわけである。かういふところから、le monde の女としての Vierge folle を責めよう、その心を動かすところのものにして、辱かじめをかけるわけである。le monde の女としての心を動かすところのもので position assurée (Délires, I, P. 43.) である、bonheur établi, fin aisée, un jour de succès であり、たかだか coeur sensibles (Mauvais Sang, P. 27.) である、これらは、L'Epoux infernal の立場における否定せられるべきものであつたからである。責められ、辱められ、その理由を理解することができず、依然として le monde の枠から脱却せられ、Vierge folle として

ては、ただ泣くより外にない。かかる le monde に対しては、常に憤怒の情を感じた L'Époux infernal としては腹を立てるわけである (Cf. Qu'est-ce pour nous? etc., etc.,.....)。

《——Tu vois cet élégant jeune homme, entrant dans la belle et calme maison : il s'appelle Durval, Dufour, Armand, Maurice, que sais-je ? Une femme s'est dévoué, à aimer ce méchant idiot : elle est morte, c'est certes une sainte au ciel, à présent. Tu ne feras mourir comme il a fait mourir cette femme. C'est notre sort, à nous, coeurs charitables.....》
 Hélas ! il avait des jours où tous les hommes agissant lui paraissaient les jouets de délires grotesques : il riait affreusement, longtemps. — Puis, il reprenait ses manières de jeune mère, de soeur aimée. S'il était moins sauvages, nous serions sauvés ! Mais sa douceur aussi est mortelle. Je lui soumise.
 — Ah ! je suis folle !

『——ねえ、あの優雅な若者が、綺麗で静かな家に這入ってゆく。名前はデュヴァルでも、デュファルでも、アルマンでも、モオリスでも、俺の知ったことじゃない。女は身も心も投げ出してこの根性曲りの低能児を愛してしまった。やがて女は死んで、今は確かに天上の聖女となつてゐる。この男がこの女を殺してしまつたやうに、お前は俺を殺してしまふだらうよ。それが俺達の運命だ、俺達のやうな情深い人々の運命なのだ……』ああ、蠢いてゐるすべての人間共が、あれに

は変挺な錯乱の玩具に見えたひと頃もあつたのです。あれは長い事、恐しくらゐる笑つて居りました。——それから、再び若い母親のやうな、可愛がられた姉のやうないつもの物ごしに返るのでした。あれの粗暴な性質がとれてくれれば、私達は救はれるでせうに。と申してもあれのやさしきもやっぱり妾には死ぬ思ひです。妾はあれの思ひのままじぢ。——ああ、妾は狂気です。

entrant dans la belle et calme maison : ——

じの la belle et calme maison とじぢのせ、ランボオの世界における無化往相面を示す言葉であらう。

Cf. Mauvais Sang, P. 28.

Si Dieu m'accordait le calme céleste, aérien, la prière, —— comme les anciens saints. —— Les saints, des forts ! les anachorètes, des artistes comme il n'en faut plus !

神が若し上天の、天空の平穩を、祈りを、俺に与へてくれたならば、
 「与へてくれると」じぢも、——古代の聖賢に与へたやうだ。「古代の聖賢のやうに。」——聖人か、強者か、ふん、遁世者、一向無用の芸術家か。

Cf. Phrases.

Quand le monde sera réduit en un seul bois noir pour nos quatre yeux étonnés, —— en une plage pour deux enfans fidèles, —— en une maison pour notre claire sympathie, —— je vous trouverai.

Qu'il n'y ait ici-bas qu'un vieillard seul, calme et beau, entouré
d'un «luxue inouï», — et je suis à vos genoux.

Que j'aie réalisé tous vos souvenirs, — que je sois celle qui
sait vous garrotter, — je vous étoufferai.

この世の中が、私達の見開いた四つの眼にとって、たった一つの黒
い森となる時に、——二人のおとなしい子供にとって、一つの浜辺と
なる時に、——私達の朗かな交感にとって、一つの音楽の家となる時
に、——私は、貴方を見付けるでせう。

『前代未聞の栄耀栄華』に取り巻かれて、静かな美しい老翁だけ
が、たった一人、この下界に棲んでゐてくれたら。——私は貴方の膝
下にひれ伏します。

ああ、私が、貴方のすべての思ひ出を実現した身ならば、——貴方
を絞め殺す術を心得てゐる女ならば、——私は貴方を押し殺すでせ
う。

この Phrases における un vieillard calme et beau であり、しかも
明らかにランボオ的世界における無化往相面を象徴してゐるのである。

今の la belle et calme maison は、正にこれに対応するもので、無
化往相面を語るものでもある。Enfance, V についてゐる “tombeau,

blanchi à la chaux avec les lignes du ciment en relief —
très loin sous terre”——漆喰の条目の浮き出した、石灰のやうに真
白なこの墓——地の下の遙か彼方に——であり、また、“Ville monst-
rueuse, nuit san fin”——怪物の都会、果てしない夜。——に対比的
におかれてゐる “salon souterrain”——地底のサロン——である。都

会の泥が赤く、あるひは黒い (La boue est rouge ou noire.) のに対
して、かかる世界は、それは、bleu blanc (Mauvais Sang, P. 13.) の
世界である。Le Ciel bleu (Mémoire) の世界である。

かかる世界における élégant jeune homme (Duvai, Dufour,
Armand, Maurice.) は、もちろん、死の寂靜の世界における人間とし
て、虚無的人間として、méchant idiot である。idiot はかかる虚無的
世界を象徴するもので、同じく Enfance, V にもさうである。

Je m'accoude à la table, la lampe éclaire très vivement ces
journaux que je suis idiot de relire, ces livres sans intérêt.

俺は卓子に肘をつく。ランプは、俺が痴果のやうに読み返す新聞や
何の興味もない書籍を、あかあかと照らしてゐる。

といつてゐる。

Cf. Une Saison en Enfer, P. 8.

Et le printemps m'a apporté l'affreux rire de l'idiot.

かうして春は痴果のむごたらしい笑ひを俺に齎した。

それが élégant であるとは、かかる死の寂靜の世界の一つの属性とし
て言つてゐるものである。

Cf. Enfance, II.

Des bêtes d'une élégance fabuleuse circulaient.

物語のやうに典雅な動物が輪を描いてゐた。

この Enfance, I—V の全体が、虚無的死の世界について語つてゐる
のだが、かかる世界は同時に、また、ennui の世界である (Cf. I, —
Quel ennui, l'heure du «cher corps» et «cher coeur».——何

といふ倦怠だらう、『親しい肉体』と『親しい心』の時刻。)、死者の世界であつた (Cf. II, — C'est elle, la petite morte, derrière les rosiers. — La jeune maman trépassée descend le perron. — 薔薇の茂みのうしろにゐるのは、彼女だ、死んだ娘だ。—— 年若くて亡くた母親が石段を降る。)

この *élegant jeune homme* が *méchant* であるが、*le monde* の否定を意味するわけである。かかる *élegant jeune homme*, *méchant idiot* を一人の女が愛するやうになれば、その女は当然死の寂靜の世界、*ennui* の世界に入りこむことになるわけである。 *le Ciel bleu* における *la morte*、即ち *une sainte au ciel* となるわけである。 *Une femme s'est dévouée à aimer ce méchant idiot : elle est morte, c'est certes une sainte au ciel, à présent* と云ふ所以である。

またこの *une sainte au ciel* は前掲 *Mauvais Sang*, P. 28 の *les anciens saints* の *le calme céleste*, *anachorètes* と同じ *une sainte* に過物なる。 *Barbare* が借りた *parole* *une sainte* に過物なる *vieille retraite, vieille flammes* *une sainte* に過物なる (Cf. *Barbare*.)

この *la belle et calme maison* に *élegant jeune homme, méchant idiot* に惹かれることにおつて、人は自己に死するわけであり、死を媒介とすることにおいて清浄なる聖なる神の世界における *une sainte* となるわけだが、ランボオの世界は、けつして単なる無化往相の世界、*ennui* の世界に止るものではなかつた。無化往相即有

化還相、死即生、清浄即汚濁として、無が有に、死が生に、清浄が汚濁に転換せられ、そこに生々潑潑たる生命の展開 (*toutes les richesses flambant; aquarium ardent*) の見られる世界であつた。また、かかる転換を行すところが *Neant* であり、*Neant* を行すことは、また *amour divin* を行する救済行、菩薩行でもあつた。その愛、救済は単なる他者の救済のみならず、先度他としての愛、救済ですらあつた。

Tu me feras mourir comme il a fait mourir cette femme にかかる死即生、無即有なる転換を行すとともに、かかる *Neant* を行すことが即愛として、先度他の救済を行すことを意味してゐるのである。 *il a fait mourir cette femme* とは死の媒介、*le monde* 否定の媒介を語る言葉である。 *Tu me feras mourir*、*Tu* は *le monde* の女としての *Vierge folle* であり、この *Vierge folle* がランボオ的世界の象徴としての *L'Epoux infernal* を殺すとは、逆に死即生、無即有として生、有への転換を語る言葉である。有化還相行である。有化還相行は即ち愛、救済を行する菩薩行である。単なる *la morte, une sainte au ciel* に止ることなく有化還相行、菩薩行を行すると、それがランボオ的世界、*L'Epoux infernal* の世界に *catéchisme* の命を *notre sort, à nous, coeurs charitables* と云ふわけである。

Cf. *Mauvais Sang*, P. 26.

Le chant raisonnable des anges s'éleve du navire sauveur : c'est l'amour divin. — Deux amours ! je puis mourir de l'amour terrestre, mourir de dévouement. J'ai laissé des âmes dont la

俺はすべての存在が、幸福の宿命を持つてゐるのを見た。行動〔生活のたつき〕は生活ではなくて、或種の力、或る神経の苛立しみを販売する方法なのだ。〔或る種の力の浪費だ。消耗だ。〕道德とは脳髓の弱さだ。

ユルウ、また Mauvais Sang, P. 28 ㄱ

La vie fleurit par le travail, vieille vérité : moi, ma vie n'est pas assez pesante, elle s'envole et flotte loin au-dessus de l'action, ce cher point du monde.

労働によって生活が花咲くとは、今も変わらぬ真実だ。〔古めかしい真理だ。〕処が俺の生活は十分目方が掛からない。世界の重点、行動といふものの〔この世の大切な点である、たつきといふもの〕遙か上層に飛び去り、漾つてゐるのだ。

とらつてゐるやうな、le monde における功利的実利的なはからひとしての action の人々をきすわけである。それは vieille vérité に属するものにすぎず、une façon de gâcher quelque force, un énervement に外ならぬものであったのである。かくて、vieille vérités は、絶対真理の立場からすれば、それは délires であり、délires grotesques であつたのであり、かかる人間どもは les jouets de délires grotesques であつたのである。

そこに le monde 否定の彼方に立つ否定的虚無的な傍観者としての idiot の笑ひが出しへるのである。この L'Epoux infernal に惹かれながらも、遂にその世界を理解することすべからず、徹底的にいつて行くことすべからず le monde の女 Vierge folle の立場からは、その笑ひ

は、まことに affreux なものであつたわけである。il riait affreusement longtemps とする所以である。

しかし、単なる否定的虚無的 idiot の世界が超克せらるべし (Cf. Bannières de Mai; Mauvais Sang, P. 27; Vies, III; Adieu; etc., etc.,)、有化齋相行の立場に轉換せらるるものに、ses manières de jeune mère, de soeur aimée が、母や愛、敬慕の普遍性を叩くべきである。

Cf. Délires, I, P. 44.

«Parfois il parle, en une façon de patois attendri, de la mort qui fait repentir, des malheureux qui existent certainement, des travaux pénibles, des départs qui déchirent les coeurs. Dans les bouges où nous nous enivrons, il pleurait en considérant ceux qui nous entouraient, bétail de la misère. Il relevait les ivrognes dans les rues noires. Il avait la pitié d'une mère méchante pour les petits enfants. — Il s'en allait avec des gentillesse de petite fille au catéchisme.

が、とにかへ、そのにせ philosophie féroce に基づく激しい否定行を媒介としてをり、そこに sauvage の一面をまぬがれなかつた。そこにはランボオの個性的一面が強く出づることも否めながら、Antique に Barbare に Gaule の世界に、その具現をなすものたわけであり、Mouvement にせらるべき

Aux accidents atmosphériques les plus surprenants,

Un couple de jeunesse, s'isole sur l'arche,

— Est-ce ancienne sauvagerie qu'on pardonne ? —
Et chante et se poste.

この最も驚くべき雰囲気の出来事の中で、
青春の夫婦が、方舟に乗って孤立して、

——それは人が許す古代の野蠻であらうか——
歌を歌ひ、身構へる。

といつてゐる。もちろん、ランボオ的世界が単純な文化の否定につきる意味での barbarisme でなかつたことは、その有化還相行を語るところに照らして疑ふべくもないことではあるが、けつしてまたヨーロッパ文化を直接肯定的には肯定してゐず、Neantを行する Nature の世界においては brute —— 人為の加はらない、うぶなる状態をいふ——なるが故に (Cf. Mauvais Sang, P. 23) 'sauvagerie' と云ふ言葉で表現し得る一面のあつたことは事実であらう。そのことが Vierge folle にとつては、たへがたい苦痛であつたし、また理解のとどかぬ点でもあつた。かく惹かれながらも、そこには所詮は、Vierge folle にとつては救ひはなかつたわけである。S'il était moins sauvage, nous serions sauvés ! と云ふ所以である。

このやうに S'il était moins sauvage と云つてゐるが、その中に人をとらへてやまぬ douceur があつたのである。その douceur は否定を媒介とする有即無、無即有、汚濁即清浄、清浄即汚濁なる転換に出てくるものぢあつた。

Cf. Barbare.

Bien après les jours et les saisons, et les êtres et les pays,

地獄の一季節註解

Le pavillon en viande saignante sur la soie des mers et des fleurs arctiques; (elles n'existent pas.)

..... Loin des anciens assassins.

Oh ! Le pavillon en viande saignante sur la soie des mers et des fleurs arctiques; (elles n'existent pas.)

Douceurs !

.....

Loin des vieilles retraites et des vieilles flammes, qu'on entend, qu'on sent.

日々と諸季節と、また、人間どもと国々とを、遙か彼方の後にして、

血を滴らす生肉の旗は、海の絹と北極の花々の上に。(いつれもこの世に存在せぬが。)

..... 昔の刺客達から遠く離れて来たけれど。

ああ、血を滴らす生肉の旗、海の絹と北極の花々の上に。(いつれもこの世に存在せぬが。)

優美なものよ。

.....

人々が理解して、人々に感じられる古めかしい隠遁や古めかしい情火とは、遙かに遠く離れて。

このやうに、単に否定的な anciens assassins, vieilles retraites, vieilles flammes ではなく、有化還相行における絶対肯定的な illustre

retraite (Cf. Jeunesse, III.) の douceur を出したのである。即

た' の douceur は l'Orient entier (Jeunesse, III.)' の sagesse première et éternelle (L'Impossible.) の doux douceur じゃ' たわわである。一切の存在の根拠としての根源的なる世界に出る' の douceur は、如何なる魂をも惹きつけようとするものじゃ'。Mais sa douceur aussi est mortelle. Je lui suis soumise. と'々' 所以じゃ'。かくて冒頭述べたやうな意味でこの le monde の femme も folle となりはてるわけである。

《Un jour peut-être il disparaîtra merveilleusement; mais il faut que je sache, s'il doit remonter à un ciel, que je voie un peu l'assomption de mon petit ami!》

Drôle de ménage!

何時かは恐らくあの人は奇蹟のやうに姿を消してしまふでせう。だけれど、若しあれが何処かの天へ帰って行かねばならぬ身とすれば、妾の可愛い恋人の昇天を、妾はちらりと目撃する筈だと知ってゐなくてはなりませぬ。」

をかした夫婦もあつたものだ。

両者の間が、所詮は“drôle de ménage”であり、その断絶はまぬがれず、徹底的に最後まで行を共にすることができないとすれば Un jour peut-être il disparaîtra merveilleusement と'々' 所以である。のみな

ん' 前じゃ' (P. 46.)

Comme ça te paraîtra drôle, quand je n'y serai plus, ce par quoi tu as passé..... Parce qu'il faudra que je m'en aille, très loin, un jour. Puis il faut que j'en aide d'autres : c'est mon devoir. Quoique ce ne soit guère ragoutant,..... chère âme と'々' するのじゃ'。その愛は、単なる男女間における愛ではなく、réinventer された愛であり、絶対の愛、amour divin じゃ' たのである。その愛、救済はすべての人に対して差別なく注がれるべきものであつた。その意味から Un jour peut-être il disparaîtra merveilleusement と'々' わけじゃ'。

この merveilleusement は、すでに何度か説明したやうにランボオの世界——この場合 L'Époux infernal の世界——に關して使はれてゐる言葉で、ヨーロッパ的でも、キリスト教的でもない点を考へて言ふのである。

s'il doit remonter à un ciel とは、前にも (P. 46.)

Avec ses baisers et ses étreintes amies, c'était bien un ciel, un sombre ciel, où j'entrerais, et où j'aurais voulu être laissée, pauvre, sourde, muette, aveugle.

と言つてをり、彼の世界が un ciel, un sombre ciel じゃ' たことを言つてゐるのである。また、それが P. 47 の Parle-t-il à Dieu? と'々' するやうに、理解できないまでも、おぼろげながら、聖なる神の世界であつたことを感じとしてゐたのである。そのことに基づく表現である。

ちうだとすれば、苦しみながらも、理解できないながらも、惹かれて
うまで行を共にした Vierge folle と同じで、その l'assomption を
多少は目撃するはずである。否、目撃してゐるはずである。l'assomption
はもちろぬ Vierge folle にある比喩的表現である。ランボオの世界に
即しては、l'assomption とは Néant を行かぬこと、Nature
としての生命を展開流転することであり、Néant を行かぬこと、即ち、愛、
救済を行かぬことである。mais il faut que je sache, s'il doit
remonter à un ciel, que je vois un peu l'assomption de mon petit
ami ! ところが所以である。

“Drôle de ménage” である。しかし、それはランボオの世界と le
monde との関係のあり方であるわけだ。その点について、最後の mais
il faut que je sache, que je voie un peu l'assomption de mon
petit ami とは言葉は、まことに意味をからものがあつて思々の
である。この両者の関係は断絶があり、理解し得ぬ “drôle de ménage”
でありながら、なほかゝる Vierge folle は L'Epoux infernal の
Néant と Nature と Amour divin と Salut とをみづむるのである。そ
のことは O Saisons, ô Châteaux にも J'ai fait la magique étude
/ Du Bonheur que nul n'élude —— 私の手がけた幸福の／秘法を誰が
脱れ得よう。—— という、また Délires, II にも fatalité du Bonheur
—— 幸福の宿命——といつてゐることと関連のある言葉のやうに考へら
れるからである。即ち、かかるランボオの世界としての Bonheur の世
界は、如何なる者ものがれ得ぬ世界であつたのであり、そのかぎり、如
何なる人もその根拠において各人が今日、此処にある底の根拠の世界を

意味してゐるはずである。ちうだとすれば、この Vierge folle は L'Epoux
infernal の世界を理解し得ず、苦しみ嘆いてゐるわけだが、なほ自己自
身が、かかる L'Epoux infernal の世界を根拠として今日、此処にある
わけであり、Vierge folle 自身が「のがれ得ぬ」「宿命」としての世界に
おつたのである。ちうだとすれば、Vierge folle 自身におつた
は、L'Epoux infernal の世界は、自覚にまではもたらされなかつたの
ではあるけれど、それはやはり自己自身のもつて立つ世界であるわけ
である。体験としては疑ふべからざる世界である。たわけである。このこと
を、mais il faut que je sache, s'il doit remonter à un ciel, que
je voie un peu l'assomption de mon petit ami ! ところが言葉で表現
してゐるやうに思はれるのである。

もし、ちう考へてよいものだとすれば、ランボオにも、迷悟一如、迷
中又迷之漢即明上又明之漢に通ずる考へ方があつたとしてもよろい
はなからうか。それはちかしの Bonheur que nul n'élude と fatalité
du Bonheur から、ランボオに悉有仏性、悉皆成仏に該当する思想のあ
つたことは疑ふべくもないことだが、この悉有仏性、悉皆成仏は、論理
的必然的に迷悟一如、迷中又迷之漢即明上又明之漢なる思想を導き出す
ものであるから、あながちに強引なる解釈に過ぎないと言ひきれない
と思ふのである。

また、ちかしの Mauvais Sang, P. 23~P. 24 にも

Oui, j'ai les yeux fermés à votre lumière. Je suis une bête,
un nègre. Mais je puis être sauvé. Vous êtes de faux nègres,
vous maniaques, féroces, avares. Marchand, tu es nègre;

magistrat, tu es nègre; général, tu es nègre; empereur, vieille demangeaison, tu es nègre : tu as bu d'une liqueur non taxée, de la fabrique de Satan. — Ce peuple est inspiré par la fièvre et le cancer.

さうだとも、俺は貴様等の光には眼を閉ぢられてゐる。如何にも俺は獣物だ、黒坊だ。だが、俺は救はれ得るのだ。貴様等こそ「貴様等も」いかさまの黒坊だ、偏執狂の、残忍な、貪欲な貴様等こそ。「貴様等も」。商人、貴様は黒坊だ。裁判官、貴様も黒坊だ。將軍、貴様も黒坊だ。皇帝、古臭い野望、貴様も黒坊だ。悪魔の醸造所から来た税金のかからない酒を喰つたな。——この民族は熱病と癌とに靈気を吹込まれてゐる。

といつてゐるのである。この箇所の註解ですでに述べたやうに、これからランボオの立場から否定せられるべき Prêtres, Professeurs, Maîtres が、また同様 Marchand, Magistrat, Général, Empereur が、しかも le monde の人間として否定せられるべき人間でありながら、同時にまた nègre であつたのである。その nègre は Nuit de l'Enfer, P. 36 における “chants nègres” と同様、ランボオ的世界を象徴する言葉であつたのである。即ち、これら Prêtres, Professeurs, Maîtres, Marchand, Magistrat, Général, Empereur が le monde の人間でありながら即 nègres、即ちランボオ的世界における人間であつたのである。ただ熱病と癌とに inspirer されてゐるにすぎないだけである。かくて、ここにも上記のごとき、迷悟一如、迷中又迷之漢即明上又明之漢に通ずる思想が語られてゐるわけである。かくてこの mais il faut

que je sache, que je voie un peu l'assomption de mon petit ami せ、この Mauvais Sang, P. 23 ~ P. 24 の上記の箇所に通ずる意味を語る言葉と解して誤なからいふと考へられるわけである。(未完)